

ハンナ・アレントにおける“一人である”ことのも多層性

——政治的主体化へ向けて——

石 神 真悠子

はじめに

本稿の目的は、ハンナ・アレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の「現われ」の概念を手がかりに、その逆の“現れていない”状態とはいかなるものかを考察することである。

アレントの政治概念は、公的領域において「誰性（who）」を暴露する「現われ」の重要性を強調しているといわれる。そのため、アレントはしばしば「現われ」の思想家として認識され、公的領域へ現れることの意義や、いかにして政治的主体化するかといった議論が多くなされてきた¹⁾。それらの多くは、「活動」において「現れる」ことと、「思考」においてひきこもることが対比的に語られ、その意味が論じられてきた。そこで本稿では、何故「現れる」ことができないのかということや、何が政治的主体化を妨げているのかという点に着目し、「現われ」の逆の状態、すなわち“現れていない”ことがどのようなことを意味するのかを検討する。

「現われ」という概念は、『人間の条件』（1958）の最重要のモチーフであるが、これは一九世紀から二〇世紀のナチズムやスターリニズムを論じた著書『全体主義の起原』（1951）の中で言及される「見捨てられている（loneliness / Verlassenheit）」ことに関する議論を発展させたものとみることができる。すなわち「現われ」の思想の背景には、人々の間に自分の存在を示すことができない—現れることができない—一事への深い洞察があると考えられる。この著作の中でアレントは“一人である”という様態を、「孤独（solitude / Einsamkeit）」、「孤立（isolation / Isolierung）」、「見捨てられていること（loneliness / Verlassenheit）」の三つに分節化している。これまでの多くの研究では、「孤独」と「見捨てられていること」の対比に重点が置かれてきたが²⁾、ここでは“一人である”様態が三つある点に着目し、アレントが述べる“現れていない”ことの

意味について考察する。

さらに、これらの課題はアレントの「世界」概念とも大きな関わりがある。とりわけ「現われ」が、人びとの活動力によって作り出された人工物で構成される世界—人や物との結びつき—によって条件づけられている点に着目し、「世界」概念との関わりにおける“現れていない”ことの意味を考察する。

1 アレントにおける“現れていない”ということ

1-1 アレントにおける「現われ」の概念

アレントは、主に『人間の条件』の中で、人々が人間世界に姿を現すことを、「現われ（appearance）」という言葉で説明している。「現われ」を欠いた生活はもはや人間の生活ではないと述べるほど、重要な概念として位置づけている。

人びとは活動と言論において、自分が誰であることを示し、そのユニークな人格的アイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間世界に姿を現す。[HC: 179=291]

アレントによれば、自分が誰であることを示し、自分のアイデンティティを明らかにすることを、人間世界に「現れる」ことだという。すなわち、「現われ」とは、「人間が、物理的な対象としてではなく、人間として、相互に現れる」[HC: 176=287傍点原文イタリック]ことを指す。それは、人間の世界に「自分が誰であることを示す」[HC: 179=291]ことであり、アレントにおいては人間の存在を示すことにほかならない。

出現（appearance）の空間（中略）すなわち、それは、私が他人の眼に現われ（appear）、他人が私の眼に現われる空間であり、人びとが単

に他の生物や無生物のように存在するのではなく、その外形 (appearance) をはっきりと示す空間である。(中略) この空間を奪われることは、リアリティを奪われることに等しい。このリアリティは、人間の次元、政治の次元でいえば、外形と同じものだからである。人間にとって世界のリアリティは、他人の存在によって、つまり他人の存在が万人に現れていることによって保証される。「なぜならば万人に現れているもの、これをわれわれは存在と呼ぶ」³⁾ からである。[HC: 198-199=320-321]

複数の人びとの中で「他人によって、見られ、聞かれる」[HC: 57=85] ことによって、「自分が誰であるかを示す」ことができる。このことを、アレントは「誰性 (who) を暴露する」[HC: 175=286] という言葉で説明する。「人間の存在を保証すること」は、「人間の共同体に現われ」[HC: 24-25=46] することであり、これこそが「現われ」⁴⁾ なのだと言う。

さらに「誰性 (who) の暴露」は、その人の言葉や行為に示されるもので、職業の種類や役職といった何性 (what) を超えた、その人自身が持つ特質のことを指す。すなわち、言論と活動の中で示される、その人が持つ「生き生きとした本質」[HC: 181=295] こそが、その人の「誰 (who)」であると言い、それが示されることこそが「現われ」であると言う。

1-2 誰性 (who) の暴露がなされる条件

では、誰性 (who) の暴露はどのような時に起こるのだろうか。アレントによれば誰性 (who) の暴露とは、言葉、すなわち「言論 (speech)」と、行為、すなわち「活動 (action)」によってなされ、それらに暗示されるようなのだと述べている [HC:178=290]。ここでアレントの「活動」の概念を確認しておこう。

アレントは、「活動」について次のように説明している。まず、人間の生活を、「活動的生活 (vita activa)」と「精神の生活 (the life of the mind)」⁵⁾ に区別している。「活動的生活」とは、「なにごとかを行なうことに積極的に係わっている場合の人間生活のこと」[HC: 22=43] を指す。これは「労働 (labor)」⁶⁾「仕事 (work)」⁷⁾「活動 (action)」⁸⁾ という三つの活動力 (activity) に分けられる。これ

ら三つの活動力を総称したものが「活動的生活」である。この生活は必ず「人びとと人工物の世界に根ざして」[HC: 22=43] いる。この「人びとと人工物」とは、「それぞれの人間の活動力の環境を形成して」[HC: 22=43] おり、これらによって構成された世界において、人間は活動することができる。

この環境、私たちがそこに生まれてくるこの世界は、製作された物の場合のように、それを作った人間の活動力なしには存在せず、また、耕作された土地の場合のように、それを保護する人間の活動力なしには存在せず、さらに、政治体の場合のように、それを組織化し、樹立する人間の活動力なしには、存在しないだろう。人間生活は、たとえ自然の荒野における隠遁生活であっても、直接間接に他の人間の存在を保証する世界なしには、不可能である。[HC: 22=43]

私たち人間が生まれてくるこの世界は、土地であり、物であり、政治体であり、人間の活動力による産物でできている。その世界は、先にも述べたように、「人びと」と「物」に関係づけられた世界である。この物は、人間の活動力によって生まれたものであるし、それを維持することも人間の活動力によるものである。政治体のような場合も、それを組織し運営していくのは人間の活動力によるものである。つまり、人間が生きる環境それ自体も、人が「活動」することによって作られた世界であるのだ。

「現われ」とは「誰性 (who) の暴露」のことであった。それは、人々のあいだで行なわれるのであった。さらに、人間の活動は人々の活動力によって作り出された“世界”においてなされるものである。つまり、「誰性 (who) の暴露」がなされる条件には、「人びとのあいだで起こりえる」ことだけでなく、世界を構成する物との関係も重要な要素になってくる。

活動的生活とは、なにごとかを行なうことに積極的に係わっている場合の人間生活のことであるが、この生活は必ず、人びとと人工物の世界に根ざしており、その世界を棄て去ることも超越することもない。物と人とは、それぞれの人間の活動力の環境を形成しており、このような場所がなければ人間の活動力は無意味である。

[HC: 22=43傍点原文イタリック]

活動的生活における「誰性 (who) の暴露」は、人びとの“あいだ”だけでなく、人工物の世界にも根ざしているのだという。物と人は、人間の活動力を形成しており、物と人がある世界において人は「活動」することができるのだという。これらの“物”は、仕事によって作り出されるが、この“物”の世界の境界線の内部で、それぞれ個々の生命は安住の地を見出す。

この環境、私たちがそこに生まれてくるこの世界は、製作された物の場合のように、それを作った人間の活動力なしには存在せず、また、耕作された土地の場合のように、それを保護する人間の活動力なしには存在せず、さらに、政治体の場合のように、それを組織化し、樹立する人間の活動力なしには、存在しないだろう。人間生活は、たとえ自然の荒野における隠遁生活であっても、直接間接に他の人間の存在を保証する世界なしには、不可能である。[HC: 22=43]

私たちが生まれてくるこの世界とは、人間の活動力無しには存在しえない。この世界を構成する“物”とは、人間が製作したものであり、「活動」によって生み出された産物である。そしてそれらは、製作し、保護し、維持するといった人間の「活動力」なしには存在しえない。そういった物を介して、人は世界に「現れる」ことができるのだとアレントはいうのである。

1-3 アレントにおける“現れていない”ということ

前節で見たように、「現われ」とは複数の人びとの中で「他人によって、見られ、聞かれる」ことによって、「自分が誰であるかを示す」ことであった。そのことは、生きている事、すなわち存在を保証されることでもあった。そしてこの「現われ」は、人びとの活動によって作り出された人工物で構成される世界にも条件づけられていることが看取された。

では、「現われ」の逆の“現れていない”とはいかなることであろうか。アレントは、『全体主義の起原』の中で、人間の存在自体がなくなってしまうこ

とを次のように述べている。

一人の人間が嘗てこの世に生きていたことがなかったかのように生者の世界から抹殺されたとき、はじめて彼は本当に殺されたのである。
[ET: 900 = III225]

「生者の世界から抹殺されたとき」、人は真に殺されるのだという。一般に“死ぬ”ということは、生物学的に人間の息が絶えることであるが、ここでは、生物学的に息絶えることよりも、この世に生きていたことがなかったかのように、存在自体が世界から抹殺されることが本当に殺されたことなのだ指摘している。アレントは、その人の存在が、人びとによって確認されなくなること、そして存在自体を抹殺されてしまうこと、それこそが「死ぬ」ということであり、生物学的に死ぬことよりもずっと恐ろしいのだと主張しているのである。ではこの「生者の世界から抹殺される」とはどういう意味であろうか。

アレントは『全体主義の起原』の中で、全体主義体制下で起きた人びとの“一人である”様態について、いくつかの位相に分けて言及している。次章では本章で考察した「現われ」の概念を念頭におきながら、“現れていない”ことの意味について検討する。

2 “一人である”ことの多層性

『全体主義の起原』の中でアレントは、主に全体主義の中で起きた人びとの様相について、“一人である”状態を、「孤独 (solitude / Einsamkeit)」、「孤立 (isolation / Isolierung)」、「見捨てられていること (loneliness / Verlassenheit)」という三つ⁹⁾の概念を使い分けて説明している。本節では、それらがいかなる意味を持つのかを検討する。このことは、アレントが生涯を通じて関心を持っていたことである。晩年の著作『責任と判断』においても人の単独性の存在様態を三種に分けて論じており、このことも併せて考察したい。そして、これらの考察により、“一人である”ことが、“現れていない”ことといかなる関係にあるのかを検討していく。

2-1 「孤独 (solitude / Einsamkeit)」

「孤独」とは、一人になって思考している時の様態を指す。「孤独な人間は独り」であるが、自分自

身と対話する「思考」ができるのだと言う。

孤独においては私は「私自身のもとに」、私の自我と一緒におり、だから〈一者のうちにある二者〉である。[OT: 476=Ⅲ321]

「孤独」において人は独りであるが、「自分自身と話す」[OT: 476=Ⅲ321] ことができる。それをアレントは〈一者のうちにある二者〉における「思考」という言葉で表現している。それは、以下のように説明される。

私のみずからとともにあり、自己によって判断することは、思考のプロセスにおいて了解され、実現されるものです。そしてすべての思考プロセスは、わたしが自分に起こるすべてのことについて、みずからとともに対話する営みなのです。この沈黙のうちのみずからとともにあるという存在のありかたを、私は孤独と呼びたいと思います。[RJ: 97-98=118]

沈黙のうちのみずからとともに対話する営み、つまり「思考」の営みは、「孤独」のうちになされるのだと言う。「孤独」とは、存在様態としては一人であるが、自己との対話が行える状態であり、みずからとともにある状態である。つまりそれは、前段の引用で示された〈一者のうちにある二者〉と表される状態のことを指している。

思考は孤独のうちになされ、私自身との対話である。しかしこの〈一者のうちにある二者〉の対話は、私の同胞たちの世界との接触を失うことはない。なぜなら彼らは、私がそれを相手に思考の対話をおこなう私の自己に代表されているからである。[OT: 476=Ⅲ321]

アレントにおいて「孤独」は一人であり、〈一者のうちにある二者〉において、「世界」との接触を失うことは無い。なぜなら、「孤独」における思考は、私と私自身との対話であることに変わりないが、そのどちらか―「私」あるいは「私自身」―に、「世界」を彷彿とさせるようなものが浮かびあがり、そこに映し出された「世界」に鑑みながら思考することになるため、「世界」との接触が生じる。つまり、「孤

独」であること、その限りにおいて私自身との対話は「世界」とのつながりを保っているといえるのだ。

さらにそのことは、自己を確立させることにも寄与しているのだという。思考における自己との対話のなかでは、自己は曖昧な存在にとどまってしまう。その曖昧な存在を、「世界」において唯一の存在として輪郭を与えるためには、他者の存在が必要なのだと説明される。それによって、人間は、交換不可能な単一の存在としての〈一者〉になることができる。

〈一者のうちにある二者〉がふたたび〈一者〉―他のもと決して混同されることのない不変の一者―となるためには他者を必要とするということだ。私が自分のアイデンティティを確立しようとするれば、全面的に他の人々に頼らねばならない。[OT: 476=Ⅲ321]

自分のアイデンティティを確立し、世界において唯一の存在となるためには他者の存在が必要不可欠なのである。逆説的だが、自己を確立するためには「孤独」のうちの思考が必要であり、かつ、世界との接触も必要不可欠である。「孤独」とは、“一人である”が、世界との接触を保ち、その世界を自分自身の心の中に投影させることによって、自己における対話を行うことができる状態である。それによって、自分自身の曖昧さから抜け出しアイデンティティを確立し、世界に現わす自己を確立していくことができるのだ。

2-2 「孤立 (isolation / Isolierung)」

「孤立」とは、人と人とのあいだの政治的接触がたちきられた状態のことを指す。

孤立とは、人々が共同の利益を追って相共に行動する彼らの生活の政治的領域が破壊されたときにこの人々が追い込まれるあの袋小路のことである。[OT: 474=Ⅲ319]

政治的接触、すなわち、人々が共同し、活動する関係やその機会を奪われた状態のことをアレントは「孤立」という言葉で表現している。

テロルを本質とする全体主義的統治下においては、思うままに支配し得るのは互いに孤立させられ

た人々であったので、専制的政府の第一の目的は、孤立を作り出すことであった。それは、人びとが共同し活動することができないようにするためである。言い換えれば、人びとを「孤立」させることは、人びとが共同することで生まれる力を持つことができない、無力な状態にさせることでもあった。

「孤立」という人と人とのあいだの政治的接触が絶ち切られることにより、人びとは共同して活動することができず、無力な状態に陥いる。しかしそれは、人間関係のすべてが絶たれ、人間のすべての能力が破壊されるわけではないのだという。経験することや物を製作すること、考えることの内容を含めた“私生活の領域”は破壊されずに残るのだという。

しかし人間関係のすべてが絶たれ、人間のすべての能力が破壊されるわけではない。経験することや物を作ることや考えることの内容を含めて私生活の領域はそっくり無痕のまま残っているのだ。[OT: 474= III318]

それはつまり、人との政治的接触は絶たれるが、政治的領域以外の領域においては、物を製作したり、経験することはまだ担保された状態である。アレントは、この状態は特に「仕事」に携わる時の人間の有り様だと指摘している。引用を示そう。

孤立とは、人々が共同の利益を追って相共に行動する彼らの生活の政治的領域が破壊されたときにこの人々が追い込まれるあの袋小路のことである。けれども孤立は、力を破壊しはするが、いわゆる人間の生産活動なるものに手をつけなればかりか、むしろこの生産活動に必要なものである。[OT: 474= III319]

また、『責任と判断』においても次のように言及されている。

わたしがみずからとともにあることも、ほかの人とともにあることもできず、何かの作業に従事している状態です。どんな種類の仕事でも、仕事にたざざわっているときには孤立しているのがふつうのありかたです。仕事に熱中しているときには、わたし自身を含めて、ほかの人は仕事の邪魔になるだけです。仕事は生産的なも

のであり、新しい対象を実際に創造することがありますが、つねにそうだというわけではありません。何かを学んだり、一冊の書物を読んだりするためにも、ある程度の孤立の状態が必要です。他の存在から守られていることが必要になるのです。[RJ: 99=120]

これら二つの引用からアレントは、生産活動において「孤立」が必要なのだと考えていることができる。アレントによれば、仕事に熱中するような時は、人々のいる世界から少し退却する必要があるのだという。それは、完全に一人ではなく、物理的に物との接触がある状態を指す。仕事や製作といった生産的な活動をするためには、「一時的に政治的領域から逃れる」[OT: 475= III319] ことによって、一人になる必要があるというのだ。しかし、その場合には、必ず誰かから守られている環境があり、そのうちにおいて安心して一人になり、製作活動に従事できるのだという。その意味において、次に言及する、すべてのものから見捨てられた (loneliness) 状態とは決定的に異なるのだ。

2-3 「見捨てられていること (loneliness / Verlassenheit)」

「見捨てられていること」とは、すべての物、すべての人からも見捨てられている状態のことを指す。[OT: 476= III321] これまで考察してきた「孤独」や「孤立」は、たとえ一人に見える状態であっても、世界との接触や、物との接点がある状態を指したが、それに対しアレントは、「見捨てられている」状態は、すべての人や物からも見捨てられているのだという。「見捨てられている」とは、完全に「一者」であり、自分自身と対話もすることができない状態である。

孤独はひとりであるのに、それでいてほかの誰か (すなわち私の自己です) とともにいることです。それは (一人のうちで二人) であることです。これに対して「見捨てられている (loneliness)」や孤立にはこのような自己における分裂はありません。(中略) なんらかの理由で孤独のうちでの思考のプロセスが中断された場合には、わたしはふたたび一人になります。するとそれまでわたしが (ともに) いた

パートナーがいなくなるので、わたしはほかの何かと〈ともに〉あろうとするかもしれません。ほかの人びとや書物や音楽などと、〈ともに〉あろうとするのです。そしてこうしたほかのものをみつけれないとき、ほかのものとは接触できない場合には、わたしは退屈と「見捨てられている (loneliness)」状態に悩まされることになります。そのためには一人である必要はありません。わたしは群衆のさなかにあってもきわめて退屈し、きわめて「見捨てられている (loneliness)」ことができます。でも実際に「孤独 (solitude)」であることはできません。わたし自身とともにあることも、他なる自己としての〈友〉とともにあることもできないからです。[RJ: 98=119-120]

「孤独」は「一者のうちにある二者」であり、自己の中で自分自身との対話ができる状態であった。しかし「見捨てられていること」においては、思考における対話の相手であった「わたし」ともいることができず、完全に一人なのだと言う。このことは、言い換えれば思考が断絶されていることを意味する。その点が孤独と決定的に違う点である。

また、孤独における思考が一人で無いのは、自己のアイデンティティを確認してくれる存在があるためであった。[OT: 477=Ⅲ322]。このような思考のなかにおいては自己が現実化され得るが、「見捨てられている」状態では、世界と接触を持った思考をすることができないために、自己喪失に陥ってしまう。

「見捨てられている (loney)」状況においては、人間は自分の思考の相手である自分自身への信頼と、世界へのあの根本的な信頼というものを失う。人間が経験するために必要なはこの信頼なのだ。自己と世界が、思考と経験をおこなう能力が、ここでは一挙に失われてしまうのである。[OT: 477=Ⅲ322]

アレントが述べているように、「見捨てられている」状態のうちでは、思考の相手である自分自身への信頼を失ってしまう。そして同時に、世界との接触が失われているために、世界への信頼も失ってしまう。「見捨てられている」状態においては、自己と世界の両方を失ってしまうのだ。それにより、自

己のうちで思考することも、世界において経験することもできなくなってしまう。

このことは、「見捨てられている」状態が私生活が破壊されることであることとも関連している。

全体主義的統治はすべての専制と同様、人間生活の公共的領域を破壊することなしには、つまり人々を孤立させることによって彼らの政治的能力を破壊することなしには存在し得なかった。しかし全体主義的支配は、統治形態としては、この孤立だけでは満足せずに、私生活をも破壊するという点で前例の無いものである。全体主義的支配は「見捨てられている (loneliness)」の上に、すなわち人間が持つ最も根本的で最も絶望的な経験の一つである、自分がこの世に全く属していないという経験の上に成立っている。[OT: 475=Ⅲ320]

すなわち、人間の政治的領域だけでなく、それ以外の私生活¹⁰⁾も破壊された状態が「見捨てられている」状態である。つまり、家族や友情といった私的な領域だけでなく、生産活動や物とのつながりについてもその対象となっている。私生活が破壊されることによって、人は自分自身の生存や存在が保障されなくなってしまう。このことは、「孤立」の位相では担保されていた「安心できる場所」が全く無くなる事を意味する。

「見捨てられている」ことが、「孤独」とも「孤立」とも異なるのは、人の世界とも物の世界とも切り離されていることだ。さらに私生活も破壊されることにより、世界に安住の地が全く無くなってしまふ。そこでは、自分自身と対話することも、自分自身を確認することもできない。すなわち、自己や世界との接触が無いために、経験することも、思考することもできない状況に置かれている。それ故、世界へ現れることができない。「見捨てられていること」は、“現れていない”状態を指していると言えるだろう。

3 アレントにおける「世界」概念

では、「世界」とは何を意味するのだろうか。

「世界 (world)」は、アレントの思想において最も重要な概念の一つであり、彼女の思想に通底する

ものと言っても過言ではない。まずアレントは「世界」をテーブルになぞらえて次のように説明している。

世界の中に共生するというのは、本質的には、ちょうど、テーブルがその周りに坐っている人びとの真中 (between) に位置しているように、事物の世界がそれを共有している人びとの真中にあるということを意味する。つまり、世界は、すべての介在者と同じように、人びとを結びつけると同時に人びとを分離させている。[HC: 52=78-79]

アレントは、人びとが世界においてともに生きるとは、テーブルを囲むようなものなのだという。人びとの真ん中にテーブルがあるように、世界も、それを共有している人びとの間にあるのだ。すなわち、世界を通して人びとは結ばれ、同時に分離させもするような場を、「世界」と位置づけている。ではそれは具体的にどのようなものなのだろうか。その用法は必ずしも一義的ではないものの、次の二点の特徴を挙げることができる。第一の意味は、人間の在り方に結びついた「現われの世界 (world of appearance)」であること、第二の意味は「使用対象物」によって構成され、有用性の論理に基づく「人工物の世界」であることである。以下ではこれらについて、先に考察した“現われていないこと”との関わりとも併せ、『人間の条件』を中心に「世界」概念の検討をすすめる。

3-1 現われの世界 (world of appearance)

本節では、「世界」概念の一つ目の特徴である現われの世界 (world of appearance) について考察する。アレントは、世界を次のように説明する。

共通世界は万人に共通の集会場ではあるが、そこに集まる人びとは、その中で、それぞれ異なった場所を占めている [HC: 57=85]

「世界」とは、人びとが共有し共に生きる万人に共通の場所であり、そこを共有しながら複数の人びとが存在する場所を指している。

そして二つの物体が同じ場所を占めることがで

きないように、ひとりの人の場所が他の人と一致することはない。他人によって、見られ、聞かれるということが重要であるというのは、すべての人が、みなこのようにそれぞれに異なった立場から見聞きしているからである、これが公的生活の意味である。[HC: 57=85]

「世界」において、一人として同じ人間はいない。一人一人が「他人によって、見られ、聞かれる」空間こそが「世界」であり、公的領域であるという。すなわち、「世界」は「現われ」の空間と言うことができる。

さらにこの「現われ」が生じるための「世界」が持つ客観性は、先に示したテーブルの例が意味するように、「物」の介在も重要な意味を持っている。次節では、この「物」と「世界」との関係について考察する。

3-2 人工物の世界

前節でも示した通り、「世界」はテーブルのように、物を介して人と人が繋がり、また離れるような、人と人の間に介在するものであった。アレントによれば「物の共通世界の介在によって他人と結びつき分離されていることから生じる他人との「客観的」関係、さらに生命そのものよりも永続的なものを達成する可能性」[HC: 87] があるとされる。

世界とは、地上に打ち立てられ、地上の自然が人間の手に与えてくれる材料で作られた人工的な家であり、それは、消費される物からできているのではなく、使用される物からできている。自然と地球が一般的に人間の生命の条件を成しているとするならば、世界と世界の物は、この特殊に人間的な生命が地上において安らぐための条件を成している。[HC: 134=197傍点原文イタリック]

アレントは、その「物」とは、人工的な物であるが、それは消費財ではなく、使用対象物なのだと指摘している。その使用対象物によって、人は「世界」で安住することができるという。

物は、その耐久性によって使用に適合し、そのほかならぬ永続性によって生命と直接的な対照

をなす世界の樹立に適合する。そしてそのような物に取り囲まれた安らぎがなければ、この生命もけって人間ののではないであろう。[HC: 135=197]

消費財ではなく、使用対象物であるとは、まず一つに「耐久性」という特徴がある。消費財は日常の衣食住に直結し、すぐに無くなってしまう性質を持つが、使用対象物が持つ「耐久性」とは、消費によって無くなることはなく、時には人の命よりも長く残り続ける。「物」の永続性によって、私たちの世界を存続させ公的空間を作ることができる。その「物」の世界の境界線の内部で、それぞれ個々の生命は安住の地を見出し、「世界」に現れることができるのだ。

おわりに

本稿ではこれまで、アレントの“一人である”という三種の様態に着目し、“現れていない”ことの意味を考察してきた。本稿の検討を通して「物」との繋がりが強い「孤立」の位相が看取された。この位相は、人びとは公的世界には現れていないものの、世界を構成する「物」との繋がりを通した世界との接触がある状態を指していた。このことは、“一人である”状態が、状況や関係性によって文脈可変的であると言うことができる。すなわち、一人でいても内なる思考において自己と対話し、世界との接触は保っているかもしれないし、大勢の中においても、誰とも何とも接点が無く「見捨てられた」状態に陥っているかもしれないし、単独性の内実はその外見だけではかることができない。また、「見捨てられている」状態では、公的領域だけでなく、私生活の領域の破壊が大きいことも看取された。このことは、政治的主体化を考える際、とかく政治的領域のほうに目が向いてしまうが、アレントの論に則せば、政治的領域の重要性ばかりを強調しているのではなく、私生活が安全に担保されていることも同じく重要であると主張していることがわかる。

また「世界」概念の検討からは、「世界」が「現われ」の場であること、そして人間の活動によって生み出された人工物で構成されていることが看取された。すなわち「物」は、「世界」を構成する重要なファクターであり、人が現れるための“条件”とも言える。

アレントの議論を現代的課題と結びつけて論じた先行研究をふまえて言えば、以上のことは特殊な一部の人たちの話ではなく、我々皆が「見捨てられる」可能性をはらむということでもある [小玉 2013]。たとえば、筆者が関わる実践例を挙げれば、若者の社会参加支援（ひきこもり支援）の場においてもこれまでの検討は重要な視点だと感じる。例えば「ひきこもり」は社会からの撤退であり、思考をしたり、自分を守るための手段であるとして、援助は必要無いとする主張をきくことがある。しかし、一人である様態の内実は様々である。はじめは登校への自主的な「拒否」としての不登校だったものが、年月が経つにつれ家から出られなくなり、ひきこもりになっていたケースも少なくない。単独性の様態は、固定的なものではなく、状況や関係性等によって可変的で文脈依存的な性質を帯びるものである。すなわち、一人でいるとき、内なる思考において自己と対話している場合もあるし、「見捨てられた」状態に陥っている場合もあるだろう。逆に、例えば学校に通学はしている、クラスの大勢の中で「見捨てられている」状態に陥っていることも起こりえる。

以上をふまえるならば、「世界」に「現れる」ことを考える際、「孤立」や「孤独」といった、完全に「見捨てられた」のではない状態の意味を丁寧にみることによって、不登校やひきこもりといった状態から脱する糸口を見出す理論的な手がかりが得られる。そしてそこから、個人の特性や積極性に依るのではない「現われ」の回路が開かれる。アレントの思想がアクチュアリティを備えたものであるからこそ、そのレンズを通して不登校やひきこもりといった現代的課題新たな装いを伴って見えてくる。すなわち「現れる」ことの困難さや「世界」に住まうことの難しさは、個人の特性に依拠するものではなく、「現われ」の場自体の喪失—すなわち「世界」の喪失—とみることができるのだ。そうした世界喪失の現状と向き合い、それを克服する道筋を探求するためにも、アレントの全体主義論や「世界」概念の詳細な検討を引き続き行っていきたい。

注

- 1) 公的領域へ現れることや政治的主体化に関して、齋藤 (1997) や、シティズンシップ教育の観点から論じた大日方 (2008)、石田 (2012) 等でその重要性が指摘されて

- いる。
- 2) 例えば亀喜 (2004) や川崎 (2004) など。
- 3) アレントは、注において次のように述べている。
「この言葉はアリストテレスの言葉であり、目覚めている人びとにとって世界は一つであり、共通のものであるが、眠っている人はすべて自分自身のところに立ち戻るのであるヘラクレイトスの言葉…と本質的に同じである。」[HC: 199=391]
- 4) 「現われ」の概念は、具体的に三つの特徴を挙げることができる。すなわち①「何性 (what) ではないこと」[HC:179=291-292]、②「唯一性を示すこと」[HC: 179=291]、③「人びとの間で立ち現れること」[HC: 180=292]、がある。
- 5) 「精神の生活 (the life of the mind)」とは、「活動的生活」と並んで人間の諸活動を構成する概念である。「精神の生活」を構成する基本的な精神的活動としてアレントは、「思考 (thinking)」、「意思 (willing)」、「判断 (judging)」の三つの活動を挙げている。(『精神の生活』)
- 6) 「労働」とは、生命過程のなかで生み出され消費される、生活の必要物に拘束される活動力のことを指す。人間の生命の必然に拘束されるものであるが、一方で、そのような活動により、世界を保護し保存するという役割も含んでいる。[HC: 7=19, HC: 100-101=155-156] また、「労働」は、生命の必然に縛られているため、すなわち私生活の領域に閉じ込められているため、世界から追放された状態であると指摘されている。[HC: 118=177]
- 7) 「仕事」とは、自然環境とは異なる「人工物」を作り出す活動力のことを指す。この「人工物」である“物”は、「耐久性」[HC: 137=224] があり、「人間生活を安定させる機能を持っている」[HC: 137=224]。このことは消費財を生産する「労働」と大きく異なる点である。「仕事」によって作り出される“物”は、「特殊に人間的な生命が、地上において安らぐための条件」[HC: 134=197] を与えるものである。すなわち私たちの人間世界を構成し、永続性を兼ね備えるという性質を持つ。そのような物を作る活動力が「仕事」である。
- 8) 「活動」とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行なわれる唯一の活動力activityであり、複数性pluralityという人間の条件、すなわち、地球上に生き世界に住むのが一人の人間manではなく、複数の人間menであるという事実に対応している。[HC: 7=20]
- 9) 著作により、訳語が統一されていないので、本論文では以下のように訳語を統一して記述する。「solitude/Einsamkeit: 孤独」「isolation/Isolierung: 孤立」

- 「loneliness / Verlassenheit: 見捨てられていること」
- 10) ドイツ語版では、“das private-gesellschaftliche” [ET: 975] となっており、私的・社会的な生活、すなわち公的領域以外全般を指している。

参考文献

- アレントの文献からの引用・参照は以下の略号にしたがい、その後に原著の頁数、邦訳書の頁数を記した。
- 一次文献
- Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, New York: Harcourt, Brace and Company, 1951.
- 本書は1951年の初版以降、加筆・修正を重ねながら複数の版が出版されている。そのため本論文では、アレント監修の最終版である1973年の三巻合本版Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism*, Harvest Book, Harcourt Brace Jovanovich, 1973. [OT]を使用。(邦訳: 大久保和郎、大島かおり訳 (1972-1974) 『全体主義の起源 I、II、III』みすず書房。*邦訳は、英語版を加筆・修正したドイツ語版 (1962) *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Frankfurt am Main, Europäische Verlagsanstalt. [ET]を底本としている) 本論文で使用したエピソードは、英語版を邦訳したものである。
- (1958) *The Human Condition*, The University of Chicago Press.
- (邦訳: 志水速雄訳 (1994) 『人間の条件』、ちくま学芸文庫。)[HC]
- (1963) *Eichmann in Jerusalem*, Penguin.
- (邦訳: 大久保和郎訳 (1969) 『イェルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』、みすず書房。)
- (1978) *The Life of the Mind*.
- (邦訳: 佐藤和夫訳 (1994) 『精神の生活』岩波書店)
- [LM]
- (2003) *Responsibility and Judgment*, Schocken Books, edited by Jerome Kohn.
- (邦訳: 中山元訳 (2007) 『責任と判断』筑摩書房。)
- [RJ]

〈二次文献〉

石田雅樹 (2012) 「ハンナ・アーレントにおける『政治』と『教育』——シティズンシップ教育の可能性と不可能性——」『宮城教育大学紀要』(47)、pp.27-36。

石戸教嗣 (2002) 「公共圏としての学校のシステム論的再編——アレントの「見捨てられた境遇」からルーマンの「尊厳」へ——」『教育学研究』69 (2)、pp.185-194。

磯前順一 (2012) 「複数性と排除——『他者なき他者』の世界を生きるために」『東京大学宗教学年報』(30)、pp.155-166。

太田哲男 (2004) 「『全体主義の起原』の射程」『情況』第三期 5 (9)、情況出版、pp.30-41。

岡野八代 (2004) 「『全体主義の起原』」『現代思想』(32)、青土社、pp.166-169。

落合隆 (2009) 「アレントの『社会的なるもの』をめぐって(公共空間の政治学)」『中央大学社会科学研究所研究報告』(26)、pp.39-55。

大日方真史 (2008) 「教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築——学級通信の事例研究を通じて」『教育學研究』75 (4)、pp.381-392。

——— (2013) 「『現われ』の教育学に向けて——私の博士論文の位置」『早稲田教育学研究』pp.111-119。

川崎修 (2004) 『アレント 公共性の復権』講談社。

——— (2010) a 『ハンナ・アーレントの政治思想 アレント論集Ⅰ』、岩波書店。

——— (2010) b 『ハンナ・アーレントの政治思想 アレント論集Ⅱ』、岩波書店。

亀喜信 (2004) 「権威と自由：ハンナ・アーレント研究(3)」『人間関係論集』21、pp.23-33。

小玉重夫 (1994) 「〈学び〉の社会性と〈教え〉の公共性——ハンナ・アーレントの公共性論をてがかりとして」『教育』(577)、pp.110-117。

——— (2001) 「社会的なるものと公共的なるものの間——教師性の脱構築へ向けて」『近代教育フォーラム』(10)、pp.231-233。

——— (2013) 『難民と市民の間で』現代書館。

斎藤純一 (1997) 「表象の政治／現われの政治」『現代思想』(25) (特集=ハンナ・アーレント)、pp.158-177。

田端健人 (2015) 「故郷喪失時代のまちと学校—ハンナ・アーレント「教育の現象学」から—」『理想』(694) pp.53-64。

朴順南 (2006) 「ハンナ・アーレントにおける『世界』概念——教育と権威の位置づけをめぐって」『哲學』(115)、pp.25-43。

森川輝一 (2008) 「『全体主義の起原』について——五〇年代のアーレント政治思想の展開と転回」『政治思想研究』(8)、風行社、pp.116-145。

——— (2011) 「アレントの「活動」概念の解明に向けて——『人間の条件』第二四・二七節の注解」『聖学院大学総合研究所紀要』(50)、pp.13-49。

——— (1999) 「ハンナ・アーレントの活動概念 (1)」『法學論叢』145 (2)、pp.66-84。

山本理顕 (2015) 『権力の空間／空間の権力 個人と国家の〈あいだ〉を設計せよ』講談社。